

開催地名	京都府大山崎町
開催日時	令和6年2月18日(日) 14:40～16:00
開催場所	大山崎町立中央公民館
語り部	山縣 嘉恵 (宮城県東松島市)
参加者	自主防災組織関係者、自治会関係者、町内在住の方 30名
開催経緯	令和元年度より大山崎町の地域防災の要として「自助」「共助」の重要性を地域全体に広め、防災活動の活性化に寄与する人材を育成することを目的とする「大山崎町防災伝道師養成講座」を実施しているところであり、その講義の一環として、災害を経験された自主防災組織や自治会の方々の経験や教訓等をお聞きすることができれば、より実りのある講義となる。また、令和元年度に町内の自主防災組織相互の連携を強化することを目的に「大山崎町自主防災組織連絡協議会」が設立されたが、活動や事業に関するノウハウが不足している。加えて、高齢化に伴う若年層への災害伝承が課題となっている。
内容	<p>～備えとまちづくり～</p> <p>(1) 東松島市について</p> <p>2005年に、矢本町と鳴瀬町が合併して東松島市となった。東日本大震災では津波で1267棟が流出し、市街地の65%以上が浸水した経緯がある。</p> <p>『おさとう山』について、1999年に佐藤善文さんという方が、いつか来る地震の為に、私費を投じて山を買い取り、山小屋や東屋を整備し備えてくださっていた山である。佐藤さんのご家族も懐疑的であったが、発災時には70人以上が『おさとう山』に避難し、多くの命を救った山である。これを受けて地元の方々は、さとう山の事を、敬意を込めて『おさとう山』と呼んでいる。</p> <p>(2) あの日の事(津波からの避難)</p> <p>野蒜海岸から約600m地点の自宅で被災した。津波がくるまで、まだ時間があると思ひ込み、義母を自宅に残し子供を迎えに小学校へ、地区センターに子供を置いて義母を迎えに自宅に戻る途中、近所の方から、津波がくるから早く逃げなさい。と言われ、地区センターから小学校に避難した。校舎1階部分は完全に浸水し、2階と3階で避難生活となった。</p> <p>避難生活については十分な物資も無い中で、山崎パンのドライバーが、被災を受け納品できないだろうと判断し、食パンを小学校に届けてくれた。子供やお年寄り優先で小さく切って分け合ったが、それがどんなに嬉しかったことか、今でも覚えている。避難してきた人の中には、食料を持参してきた人もおり全員で分け合った。避難する事が一番大事だが、あらかじめ用意をしておき、少しでも食料を持参する事も大事である。</p> <p>発災直後はまず、安否確認が大変ではあるが一番重要である。アナログな紙とペンで情報を書き出し、SNS等を利用して拡散できれば、見た人は安否確認ができるというわけである。これは、安否確認においては、かなり有効な手段であると考えている。</p>

(3) 避難所運営について

避難所の運営には女性の視点が大きい役に立ち、避難所運営では3つの教訓を得た。1つ目は衛生面の配慮と工夫である。例として土足禁止エリア、手洗い、マスクなどが挙げられる。2つ目は揉め事を防ぐ為の工夫として、情報の共有がいかに重要であるかを再認識させられた。最後にリーダーや役員さんを孤立させないということである。役職者だけで運営するのではなく、皆が一丸となって、皆で係を運営していくことが重要である。

(4) 東日本大震災を経験しての思い

反省すべき点としては、周知事実として避難場所は幾通りも知っておくことが大事であるということ。また津波からの避難を想定して、校舎の2階以上に避難する訓練をしていなかった事は、後悔が残る結果である。気付きとしては、家族で震災時の安否確認をすることである。

待たせない、待たない、戻らない事が、避難時においては重要であるが、避難場所は災害により使えないところもある、ということも知っておくべき必要がある。地域の人と、平日頃からの挨拶などのコミュニケーションを取り、対人関係の構築も必要である。また車で避難も想定した訓練の重要性も必要であると考えます。震災後は自主防災組織の強化、備蓄倉庫の見直しも行った。全国の皆さんの支えがあり、今がある。



開催地より

地震などの災害に直面した際の様々な課題や緊張感等を学ぶことができたため、今後「自助」「共助」の重要性を出前講座等で改めて地域に伝え、大山崎町の防災力向上に努めたい。